

# 手賀原氏と手賀の史跡

～ 手賀歴史散歩見て歩き

2010. 12. 19



# 1. 手賀とは

- 手賀沼は「手賀」という地名を冠された沼である  
→ 印旛沼は「印旛郡」の「印旛」を冠するが、  
手賀沼は一地域の地名に過ぎない「手賀」  
を冠するのはなぜ？

手賀 …… 「津」(つ)のある「処」(か)という意味らしい\*  
(茨城県にも、「手賀」という地名がある)

\* 『沼南町史研究』第7号「所の呼び方について」染谷勝彦氏論文 による

- 手賀沼の「手賀」は大治5年(1150) 平経繁が書状  
のなかで「手下水海」と使用したのが初出という

# 手賀の墓地にあった石碑

手賀沼の中に突出でた丘、昔人此所を手賀島と呼ぶ。吾が祖先は、田畑を開墾して苦節数代安住の地とした。弘長三年（西暦1263）竜猛山興福院を寺台に建立、天正十八年（1590）手賀城落城と共に焼失。寛永三年（1626）寺台から手賀城二の丸跡に移転、竜猛山円城寺興福院と称し、末寺十一寺を擁した。又、千葉氏の家臣原氏は手賀城を築城し、盛期には一万二千石を領し常備五十人の武士を常駐させたという。小田原北条氏と共に落城、土着百姓となる。

当地に墓が多い所以であり、浄観墓地も其の一つである。昔よりの慣例に従い管理して居たが（略）工事無事完了に依り、平成十二年十一月十二日開眼式を挙行した。完成に当たり此の墓地に眠る祖先の霊に感謝を捧げ、子々孫々の繁栄を祈願して記念碑を建立する。

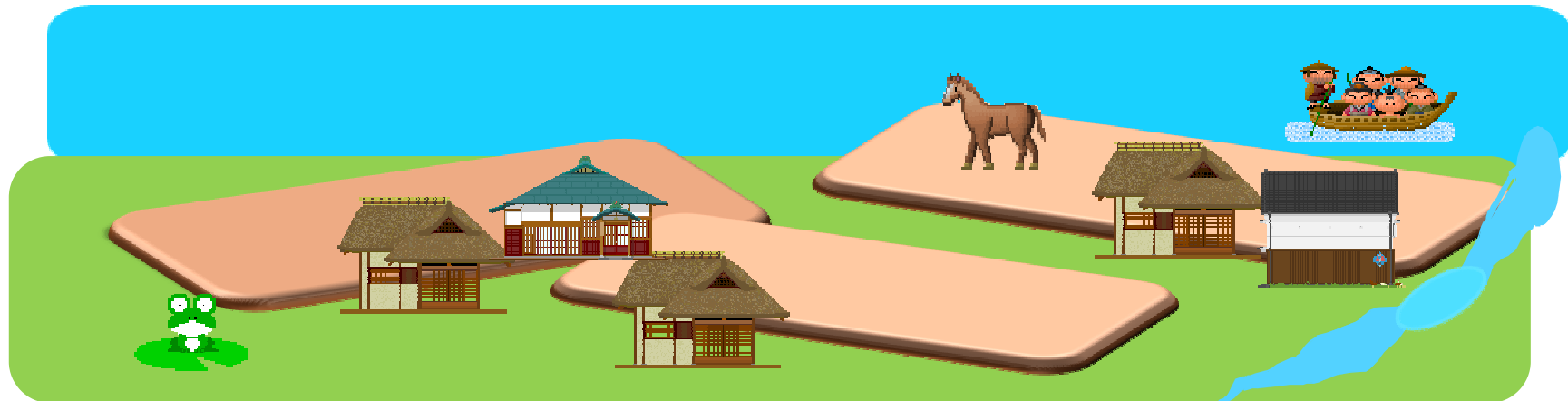
平成十三年三月吉日 ---

\* 一部当用漢字に変換

手賀島、興福院、手賀城と城主原氏 . . .  
短い文章に凝縮された歴史

# 手賀島

- 手賀沼沿岸地域は、台地と谷の入り組んだ地形
- 過ごしやすい台地下に集落が形成
- 香取の海という内海による水上交通、交易の便と谷津田開発を背景に中世の集落が成立



## 2. 手賀に原氏が来るまで

- 寺台に古代の寺院があった

- 手賀廃寺（興福院の前身かは不明）

興福院は寺伝では大同年間の創建

現在の平和共同墓地も近年削平  
されるまで台地

### 寺台遺跡

### 古代瓦等出土

平安-軒丸瓦(素文縁八葉単弁蓮華文、素文縁六華単弁蓮華文)、平瓦、軒平瓦(唐草文)



## 2. 手賀に原氏が来るまで

- 相馬御厨の一部で、相馬氏が支配

鎌倉時代、手賀など南相馬郡の一带は、谷津田の開発がさかんにされる

- 南北朝期を境に、相馬氏は奥州へ拠点を移し、下総の所領は細分化されて、次第に衰退  
(戦国時代には下総相馬氏の嫡流は守谷を拠点とした局地勢力へ)

# 原氏とは



- もともと千葉一族であり、千葉氏の重臣（家老クラス）
- 千田庄原郷が名字の地とされる
- 康正元年（1455）、原胤房は、馬加系千葉氏の馬加康胤とともに兵を起こし、従来の千葉宗家を滅ぼして、馬加系千葉氏を擁立して実権を確立
- 本拠地 千田庄→生実（上総武田氏に攻撃され退去）  
→大野など→第一次国府台合戦で小弓公方滅亡後、生実に復帰、また臼井を吸収
- 臼井原氏が本流、他に大野原氏（のちの佐倉原氏）、弥富原氏、小西原氏など庶流も多い

# 手賀原氏

- 江戸時代より前の系譜がよく分からない
- 通説では、「戦国時代の前期に、原氏の一族である臼井城の原胤貞が、千葉宗家の当主である千葉勝胤より手賀600貫の領地を与えられて、手賀原氏初代となり、その胤貞によって、この城は築城され、胤貞、胤親、久胤の三代の居城となった」
  - 記録があるのは久胤（最後の城主、文禄元（1592）年没）のみ。  
それ以前は信じ難い（原氏の有名な人名に仮託？）
- 本土寺過去帳に「手賀出雲内 妙自 天正十五丁亥正月」とあり、原出雲と名乗った人物がいたのみ判明

# 手賀原氏

- 原胤隆：生実城主なるも、上総の武田（真里谷）信保、足利義明の攻撃をうけ、八幡庄（市川大野周辺）へ  
→ 永正6年（1509）小弓にて柴屋軒宗長と連歌  
永正14年（1517）小弓から八幡庄大野へ落ちのびる  
布川にて天文5年（1536）に没（豊島氏との関係）



上総武田氏の  
真里谷城跡

- 原胤隆の弟、原胤宣は出雲守を名乗る  
→ 本土寺過去帳の「手賀出雲」は原胤宣の子孫か
- 最後の手賀城主、原久胤の母は布川豊島氏の出身という  
⇒ 手賀原氏は伝承にいう臼井原氏の系統でなく、大野原氏から派生したと考えられる

# 原氏が拠った市川市大野

- 大野など八幡庄は、元は九州千葉氏の本拠  
⇒ 九州千葉氏の支配が衰え、原氏が進出

- 大野城

大野は千葉氏家臣の曾谷氏や太田氏のちに原氏がおさめた所で、妙見信仰も残る地域である。将門伝説が残るのは、そのためか。



- 大野原氏

原光胤など 受領名は**豊前守**  
(大野の光胤山本光寺は原光胤に由来し、原光胤がつくった豊前坊が前身)

大野原氏は後に本佐倉へ移り、千葉氏の近臣となっらしい

# 手賀城

- 手賀の台地全体を占地  
東西680m×南北450mほどの広さ



(軍船の繫留地)



# 興福院

- 真言宗豊山派の古寺
- 寺伝では平安時代の大同年間創建

鎌倉時代に再建され、現在の名前の興福院となった。

本尊：十一面観音（仏像は室町時代を下らない制作）

⇒ 十一面観音は妙見神の本地仏　：特に戦国以前はそう言われた

- 手賀原氏の戦勝祈願寺



墓股に  
九曜紋



# 手賀城跡

- 主郭（本丸）は現在畑で石碑が建っている



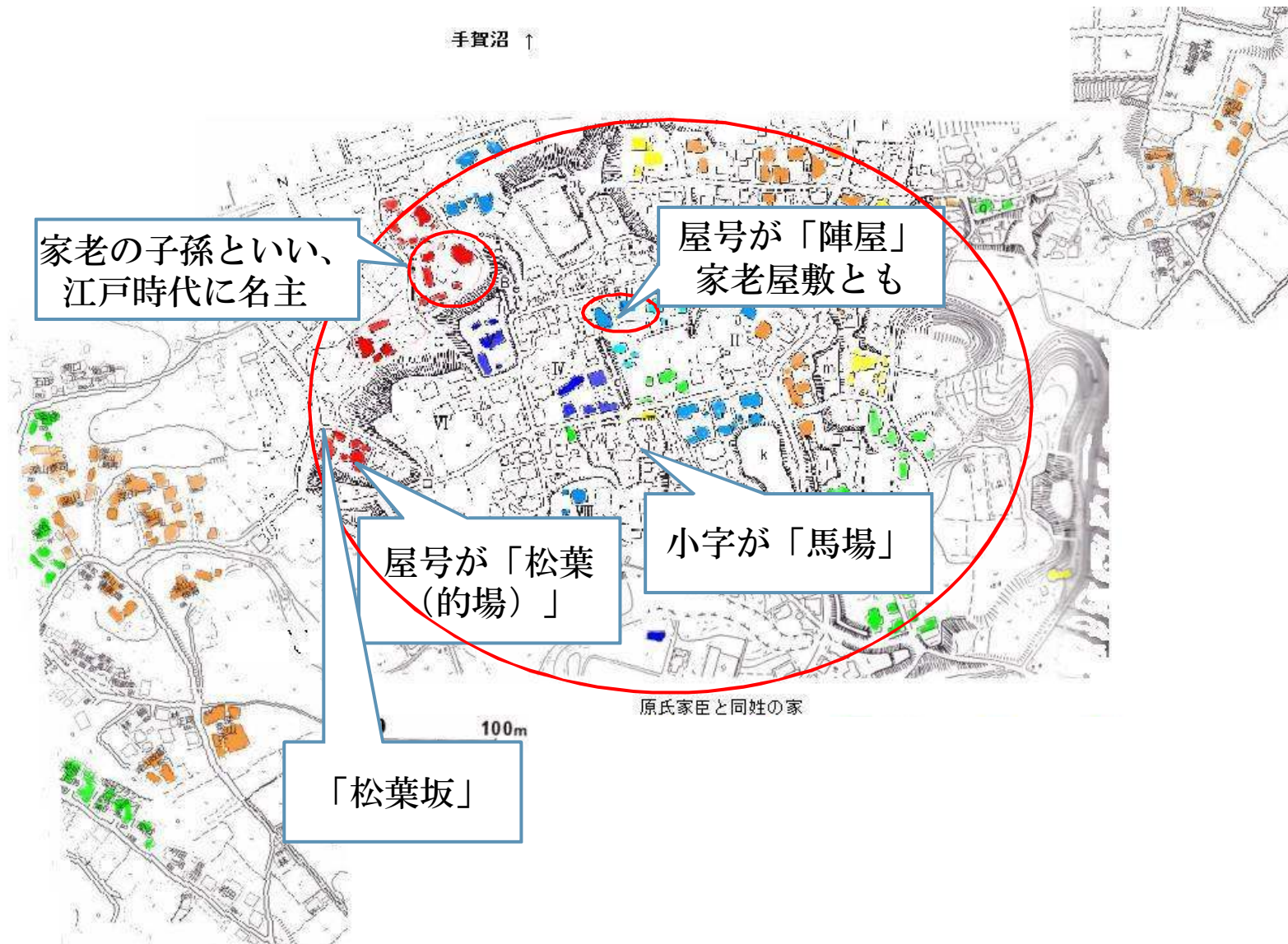
- 手賀の台地の各所に土塁、堀跡、腰郭など

主郭近くの  
土塁と堀底道



腰郭

# 手賀城跡の地名、屋号、家臣のご子孫方



## これも遺構

- 道端に土塁、道そのものが堀跡



3mほどの高さの土塁



堀底道

- 城跡中心部の道はクランク

手賀城に限らず、大井追花城、  
名内城(白井)にも道のクランク  
はある



# 旧ハリストス正教会

- 手賀には明治12年からロシア正教が布教

船橋の法典教会を皮切りに、印西大森などにロシア正教が布教され、明治12年（1879）には手賀にも布教された。当地の豪農湯浅家、岩立家が入信、明治16年（1883）には岩立藤蔵の所有地に、使用していた民家を改造移築した教会を設立。



- 戦時中は教会の機能を停止し、疎開者が居住



竈跡？には「水戸黄門」のドラマ  
でお馴染の無双窓も

# 南蔵院

- ・ 興福院の「隠居寺」として創建  
創建は鎌倉時代末  
(記録等から室町期には存在しているのは確認)

お寺とは関係ないですが、・・・  
近所のお宅の屋根(2重になっている)



# 北ノ作古墳

手賀沼沿岸最大級で最古の古墳



1号墳：方墳  
3世紀後半のもの



直刀、劍、鏃、  
斧、ヤリガンナ  
など出土

2号墳：前方後方墳  
：4世紀のもの

管玉が出土



## ヨタイ観音

- ・ 村田重左衛門宅敷地につくられた、三十四体の石仏を安置する観音堂



# 兵主八幡神社

- **兵主神社**（関西、特に兵庫県に多い神社）と**八幡社**を合祀した神社  
文化14年（1817）、現在の本殿が手賀、片山両村によって造営、両村の鎮守とされる  
（経津主命、譽田別命が祭神）
- **手賀囃し** 七月の第一日曜 興福院からここまで神輿渡御、山車がひかれる
- 原氏の馬場が参道になっているとの伝承あり



屋根が特徴的な本殿には、細密な彫刻がめぐる

## 原氏墓所

- 原久胤（最後の手賀城主）の妹の墓、原胤次（久胤の弟で江戸時代初期召し出されて旗本（町奉行与力）になった）およびその子孫の墓、供養塔など
- 仏教式の墓にまじって、十字架も



原氏重代の墓と中央は供養塔



原氏一族のほか、50人余の刑余者が眠っている

## 元祖マルチ人間の人生を歩んだ手賀原氏末裔

- 与力→キリスト教入信→洋書店創業→女学校創設・・・
- 福島事件を題材にした出版で投獄された経験から、  
刑余者保護の活動 →日本で初めての教誨師となる



原家宗家の原主水は徳川家康に仕えたが、キリスト教に入信、額に入れ墨、手足の筋を切られて追放されるも節を曲げず、ついに火刑に処された



明治になり、その事実を知った胤昭は自らキリスト教に入信、巣鴨教会を設立  
ミッション系の原女学校（のちの女子学院）創設

→ 日本で初めてクリスマスをサンタクロースに扮して祝う

原胤昭の墓、後ろには小さな刑余者の墓が並んでいる

## 柳戸六所神社

- 下柳戸は、相馬義胤の娘土用御前と岩松時兼との娘「とち御前」が藤原氏に嫁して後家になり、娘「藤原土用王御前」に譲与した所領の一部  
→建武元年（1334）に岩松直国を養子、下柳戸を譲与？
- 下柳戸は南北朝期まで遡る中世以来の集落
- 六所神社は創建時期不明なるも、国府祭場の形式



下柳戸から白井市今井、印西方面を望む



一ツ井戸

柳戸砦跡



## 参考文献

- 『沼南町史』 (一) 昭和54年 (1979年) 旧沼南町
- 『沼南風土記』 昭和56年 (1981年) 旧沼南町
- 『沼南風土記』 (二) 平成元年 (1989年) 旧沼南町
- 『東葛の中世城郭』 千野原 靖方著 崙書房出版 平成16年  
(2004年)
- 『「江戸町与力の世界 一原胤昭が語る幕末」 図録』  
千代田区立四 番町歴史民俗資料館刊 平成19年 (2007年)